

巻頭言

Cover Story

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。在校生諸君の進級とあわせて言祝ぎを…。

さて、本校はご存じの通り、豊かな自然に恵まれています。貴君らの多くは面接で志望理由を問われたとき、「豊かな自然環境の中で落ち着いて勉学に取り組めるからです」と答えたはず。その発言に責任をとる時が来ました(笑)。

諸君らが本校で学ぶ理由の一つは、認識空間の厚みを増して、世界を豊かに見るためです。このキャンパスを見わたした時、漠然と「緑が多い学校」と認識する人と、「まもなくソメイヨシノが終わり、イヌザクラが花開くキャンパス」と認識できる人では、どちらが豊かな人生を送りそうでしょうか。

福澤先生は、この複雑な世界の理(ことわり=因果関係)を実証に基づいて解明し、問題を解決していく科学的な姿勢、考え方をサイエンス(=実学)と言うのだとおっしゃっています(サイエンスを「科学」という意味で使っていませんでした)。在学中に、あなたなりの答えを導き出せるようになっていけることを祈ります。

本校は、しばらくの間、野花が色鮮やかな季節の中にいます。どのようなものがあるのかを本誌を手掛かりに見つけてみてください。

(Miyahashi)

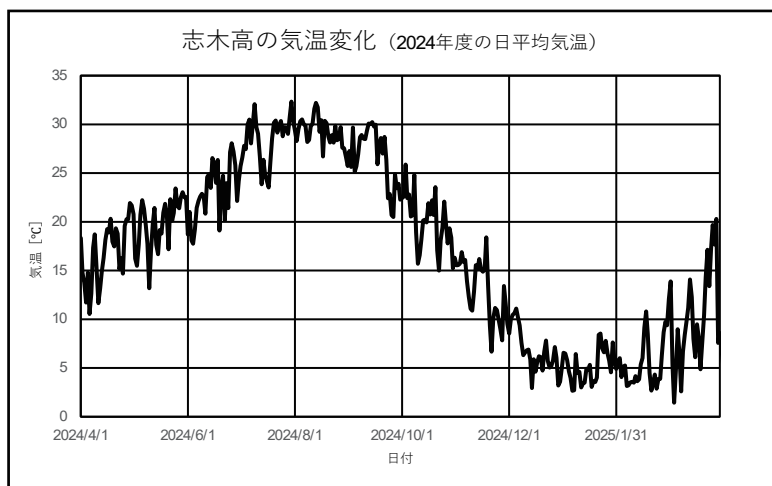


志木高の気象観測

Meteorology

志木高には百葉箱がグラウンドの隅、ソフトテニスのコートの脇にあります。百葉箱の横からタコのように足が伸びた(実際にはケーブルです)先にはCampbell Weather Stationという自動気象観測装置があります。2020年の夏に設置し、気温や降水量、湿度、風向・風速、気圧、日射量、落雷、さらには地中の温度(深さ0.5m、1.0m、1.5m)の各種データを10分ごと自動的に記録しています。

図は校内の一年間の気温変化です。計測は10分毎に記録していて1日に144回記録されます。144回の平均値を日平均気温として一年の変化をプロットしました。みなさんが感じる季節の変化と実際の気温の変化は合っているでしょうか？



(Higuchi)

ベンチをピロティと事務室前のコピー機わきに設置しました。気づいた人もいないのではないでしょうか。

昨年、念願の光彩館が完成し、ホール、大教室として、かつては出来なかったようなコンサートや様々な授業に利用されていますね。しかし、この光彩館を建設するにあたっては、30本もの樹木が伐採されました。中には樹齢100年を超えるようなケヤキをはじめ、校内に1本しかなかったイタヤカエデなど、貴重な樹木もありました。これらの樹木は資源としても貴重です。三重県への「志木の森ツアー」では毎年、参加者が植樹・育林活動し、CO₂固定など森のはたらきを学び貴重な木材資源を育てています。ですから、今回の伐採木をただ処分してしまうのはナンセンスとしか思えないわけです。

国際社会では今、SDGsへの取り組みが当たり前になっている中、慶應義塾もグローバルな先導者となるために、カーボンニュートラルなどその取り組みを具体的に進めている最中です。その中で、志木高校としても、伐採木を何とか利用できないかと考えたわけです。樹齢が100年にもなる大樹であれば、100年間の光合成で固定されたCO₂の塊であるわけで、これを燃やして処分したらCO₂を大気中にあつという間に戻してしまうことになります。これを木材として活用すればガスを発生させることもないわけで、気候変動抑止に貢献できることにもなります。これをカーボンストックと呼ぶのですが、何とか伐採木の一部でもそうして活用できないものかと考えたのです。しかしながら、伐採木はそのままでは利用できず、乾燥して板にして加工するという過程が必要になってきます。

これが校内ではできないので、どこか加工できる所に運搬しなければならず、その費用もかかり、また、加工を請け負ってくれる製材業者も探さないといけないので、なかなか実現が難しかったわけです。このような状況下の中、今回は（株）長谷萬さんがその加工を引き受けてくれることになり、ようやくベンチ6脚が完成したわけです。ちなみに（株）長谷萬はもともと木場の老舗の材木屋さんで、現社長の長谷川氏も義塾の学校林運営委員をされ、義塾とはかかわりの深い会社です。ベンチはDLT工法と言って、釘や接着剤を全く使わず、木ダボだけで張り合わせて作られた、まさしく環境にやさしい製品となりました。伐採木の再生としては理想的な形であると言えます。

皆さんもぜひ、そのベンチを自分の目で確かめて触れてぜひ座ってみてください。まだほのかにヒノキの香りも残っているし、木のぬくもりが感じられますよ。ずっと志木校生を見下ろしていた樹木が、伐採はされても再びベンチとして私たちと共に校内に存在し続ける。理屈ではなく、なんかいいと思いませんか。

ちなみにこの6脚のベンチで、0.34トンのCO₂が固定されたまま残ったということになるそうです。これって、なんかいいと思いませんか。



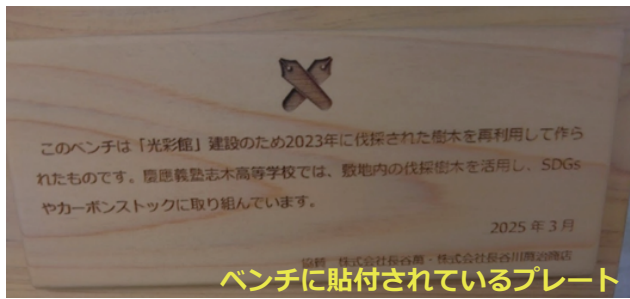
光彩館建設前の伐採対象樹木
(2022年夏)



伐採木を利用して完成したベンチ
(2024年)



伐採後、校内に平置きされたままの伐採木 (2023年)



ベンチに貼付されているプレート

(Izawa)

Haiku

【春の句】

かたやあれに梢を囃す花卉あり
蜩より小さき花びら水のうへ
たんぽぽの広がつてゐる柿畑
春芝にアシカの如くラグビー部
駆け足の佐川急便風光る

前北かおる

1年生は通学にも慣れてきた頃だろうか。電車の定期券を手に入れた人は（通学時間が長ければ長いほど）行動範囲が広がったはずだ。志木高は校内の環境も良いが、埼玉県内にあっても都心に近く、文化施設へも行きやすい。春は展覧会の季節。各地の美術館・博物館で見応えのある展覧会が開催される時期である。

上野の国立西洋美術館では、いま企画展「西洋絵画、どこから見るか？—ルネサンスから印象派まで」が開催されている（6月8日まで）。米国・カリフォルニア州にあるサンディエゴ美術館との共同企画で、ヨーロッパから遠く離れた二つの美術館の、にもかかわらず充実した西洋古典絵画コレクションをあわせて並べ、西洋美術の魅力を分かりやすく紹介しようとの趣旨である。

実際に展示を見ると、解説は丁寧だが、人によってはまだ難しく感じられるかも知れない。解説が作品からやや離れて設置されているのも気になった。ただ、西洋美術の見方を、実際の作品に即して多角的に紹介する展覧会は意外に珍しく、「絵の見方が分からない」という人はもちろん、見慣れた人にも新たな視点を提供する良い企画と感じた。日本では出会う機会の少ないジョットやフラ・アンジェリコが描いた宗教画、17世紀スペインの宗教彫像が見られたのも面白かった。17世紀スペインを代表する画家の一人、フランシスコ・デ・スルバラン（Francisco de Zurbarán 1598-1664）の《神の仔羊》も、四肢を縛られた仔羊を克明に描き、特に目を惹いた（左下図）。スペイン人によって建設された都市サンディエゴの歴史を背景に、スペイン美術のコレクションが充実しているのが同美術館の特徴で、そうしたコレクションの歴史にも言及があった。

会場の出口近くには、観客が感想を付箋に書いて自由に貼り付けられるパネルが設置されていて、《神の仔羊》の写真も掲げられていた。閉館間際にざっと眺めたところ、「モフモフ」とだけ書いた付箋のほか、（正確な文言は忘れてしまったが）羊に天使の輪を付ける発想が斬新、との感想があった。確かに画中の仔羊の頭上には光輪があらわされている。しかし、これはまったく新しい。この絵が静物画のコーナーにあったのも悪いのだが、キリスト教の知識が多少なりともあれば、この仔羊が十字架上で死んだ救世主イエスをあらわしていることは自明であり、頭上に光輪を描くのが何ら不思議なことではないのが分かったはずだ。羊の光輪は西洋絵画の伝統に則った表現なのである。

新しいものを発見するには、古いものを知らなければならない。学校で学ぶのはそのためでもあるのだが、ここで先の感想の主を非難しようとは思わない。強調したいのはむしろ、絵をよく観た結果、羊に光輪がついていることを自ら発見して、それを不思議に思った経験の貴重さである。それがすでによく知られていたことかどうかは、ひとまずは関係ない。知識は後からつければ良い。自分にとって新しいことを知るのはそもそも楽しいことだし、自分で発見したことは強く印象に残るはずだ。そういう経験ができるのが美術館や博物館という場所なのである。



スルバラン《神の仔羊》1635-40年頃 サンディエゴ美術館
（展覧会公式サイトより）

せっかく大学受験のない学校に入ったのだから、ぜひ学校の中でも外でも、「答え」だけではなく「問い」を見つけてほしい。それこそが学問の入口だと思う。

理科棟と文科棟の間をグラウンドに向かって降りていくと桜の大樹がある．例年，葉が先に出るのでなんとなく「ヤマザクラ」（葉が先に伸展する桜の代表種）だと思っていた．井澤先生から質問を受けて改めて確認するとヤマザクラと異なり新芽が緑色，花柄に多くの細毛が生えている．どうやら「カスミザクラ」であるらしい．この種は分類上の位置が安定しておらず，ヤマザクラやオオシマザクラと同種と考える場合もある．ゲノム解析の進展にともない，明らかにされていくであろう．サクラは奥が深い．Gakken（学習研究社）が発行するフィールドベスト図鑑『日本の桜』には，日本に野生するサクラとしてまず10種を挙げているが（ソメイヨシノは入っていない），これらが掛け合わされて作られた園芸品種は100種に上るのである．

[2025年1月～2025年4月までの開花情報]

Grass

15. Jan ムラサキカタバミ, ホトケノザ
27. Jan オオイヌノフグリ, ハルジオン, ノボロギク
26. Feb カタバミ, ヒメオドリコソウ, ミドリハコベ
7. Mar カヤツリグサ, チチコグサ
11. Mar オオアラセイトウ, タネツケバナ, ヤエムグラ, ハナニラ
18. Mar セイヨウタンポポ, タチツボスミレ, ヘビイチゴ, ノゲシ, ムラサキサギコケ
25. Mar カントウタンポポ, ニホンスミレ
2. Apr キュウリグサ, カラスノエンドウ, チチコグサ, ムラサキケマン, カタクリ, カキドオシ, イヌムギ, スギナ
8. Apr フデリンドウ, トキワハゼ, ヤブニンジン
15. Apr カラシナ, シバクサ

【カスミザクラ】
バラ科サクラ属



(Aramaki)

Wood

- 【3/25】オオシマザクラ
- 【3/7】カンヒザクラ
- 【3/7】カワヅザクラ
- 【3/25】コブシ
- 【4/2】イロハカエデ
- 【4/15】ハナミズキ
- 【3/25】ソメイヨシノ
- 【4/2】クヌギ
- 【4/2】シダレザクラ
- 【4/8】トウカエデ
- 【3/18】イヌシデ
- 【2/26】アンズ
- 【4/2】アオダモ
- 【3/25】カスミザクラ
- 【3/25】ドウダンツツジ
- 【3/18】シキミ
- 【3/25】ヤマザクラ
- 【4/15】イチョウ♂
- 【3/25】ヒサカキ
- 【3/18】レンギョウ
- 【4/8】ケヤキ
- 【3/25】アオキ
- 【3/7】アセビ
- 【4/15】ノダフジ
- 【4/15】コデマリ
- 【4/2】ポプラ
- 【4/8】ヤマブキ
- 【4/2】ヤマグワ
- 【3/18】ユキヤナギ
- 【2/8】ウメ
- 【4/15】カラタチ
- 【4/8】ナツグミ
- 【4/2】エノキ
- 【3/11】サクラ(サトウニシキ?)
- 【4/8】トウカエデ
- 【3/18】ハナモモ
- 【2/26】ウグイスカグラ
- 【3/25】チョウショウインハタザクラ

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。
名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	歴史・美術 (博物館)	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化 (香道)	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化 (茶道)	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)